

---

# クワガタムシ

En

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クワガタムシ

### 【Nコード】

N7980Z

### 【作者名】

En

### 【あらすじ】

ヒーローと

正義と

淡い恋

十八禁要素皆無だから張りなおします

(前書き)

どうしてこうなった

「『黒く輝く体と

二つの大顎を持ち

その勇ましさを見せつける甲虫

そういう物に私はなってしまった』」

「何それ。ゴキブリの話？」

「クワガタだ！そもそもゴキブリに大顎は無い！」

桑野は友人の橘に叫んだ。

正確には、クワガタの話ではないが。

「またいつもの自慢話だろ？」

橘は呆れて言う。

彼の自慢話はいつもの事だ。

「これは正義の話であって、自慢話ではない！」

「『お前の』正義の話はそのまま自慢話になるんだよ」

どうせ、いつもの自殺者を助けた、とか火事で逃げ遅れた人を助けた、とか不良をボコボコにした、とかだ。

「その力はお前の力であって、そうでない物だろうが。たまに弱者苛めの話もあるし、それが正義の話かよ」

「これは俺の力だ！そして俺は正義の男として当然の事をしただけだ！」

鬱病の自殺者を助けた次の日に、また自殺しようとしたらしい。

未遂で済んだが。

今は社会復帰してるらしい。

最終的に助けたのは桑野じゃなくて、その人を治した医者だ  
火事の時もビルに飛び込んで女の子を助け出したまでがいいが脱出  
の瞬間無駄にガラスに飛び込んで怪我をさせている。

不良に至っては、全治半年で済んだ者から、未だ意識不明の者まで  
いる。

橘は何度もそれは正義ではないと言った。

対して、彼は自分の行為は完全に正義だと言い張る。

根拠は非常に単純だ。彼はヒーローの、改造人間の力を使っているのだ。

「それで今日は何したの？また不良退治？」

「最近は不良を減っていてな、まあひとえに俺の活躍のおかげだな。そうではなく、昨日とんでもない物を見たのだ」

「何だよ。新しい改造人間か？」

「似たような物だ。恐らくは組織の怪人だろうがな、巨大な女が隣町の大学の建物を踏み潰していたのだ。愉しそうにな」

流石に橘は驚いた。

「え？どこで！？てか怪人が完成したの！？お前戦えよ！」

「急いで大学に向かったが女には逃げられてな…。瓦礫の中に生存者がいないか探したが死体の一部も見つからなかった。相当強く踏みじったのだろう…。許せん…！」彼の話から思い当たるのはX位だがテレビで見た感じ優しそうだったし、そもそも彼女は組織を裏切っている。

新聞では『悪の組織ファルコ、生物兵器の開発にまたも失敗。』と書いてあった。

「そうか…。怪人が完成したのか…」

「奴らファルコを潰すのは俺の使命だ。この力は奴らを倒す唯一の剣だ」

「確か、改造人間は全部で十人いるから唯一じゃないよな」

「あいつ等はやる気が無い。この力を正義の為に使い、ヒーローとして戦っているのは俺だけだ」

橘は、その使い方もどうかと思ったが敢えて言わなかった。  
最近の桑野はそういう事を言うと思ひ出して、変身して殴ろうとしてくる。

というか先日、一人のクラスメイトが殴り飛ばされた。謹慎は昨日までだったからパトロールと称して、外出していたのだろう。

「いよいよこの時が来たか…。俺は明日あの怪人を倒しに行く。お前も来い！ヒーローの初戦を見せてやる」

明日から橘たちの高校は冬休みだ。

「いいぜ。どうせ暇だし。」

橘は、桑野の力を知っている。

正直、巨人だろうが怪人だろうが桑野の敵ではないと思っていた。断つても桑野の事だから無理やり連れていくだろうし、怪人とヒーローの戦いをリアルで見れる機会なんてそうそう無い。

安全が保証されてるならなおさらだ。

彼に断る理由はなかったのだ。

「ここに建物があったのだ」確かに、巨大な足跡と瓦礫の山がある。桑野の話は本当だったらしい。

「可哀想に…ここには逃げられなかった人もいた筈だ。安心してくれ。あなたたちの無念は俺が果たす」

「つか、お前その女がどこに居るのか知ってんのか？」

「暫く探したが見つからなかった。だが、帰りに寄った駅前のラーメン屋で情報を掴んだ」

桑野は改造されてからエネルギー消費量が多いのか一般人の十倍は食べる。

だから、駅前のラーメン屋のジャンボラーメンは小遣い稼ぎにもなりちょうどいいのだ。

「資金を調達しようとラーメンを食いに行ったら閉店していてな…」

店主に話を聞いた所、巨大な女に食い尽くされたらしい」

「それで？」

「恐らく俺の資金調達を邪魔したのだろう。建物を壊したのも俺を怒らしておびき寄せる為だ。つまり狙いは俺だ。歩いていれば必ず見つかる」

橘はここにきて桑野についてきたのを後悔した。

要するに、彼は何も分かってないのだ。

一気に帰りたくなったが、そう言うと後が恐い。

橘は桑野に従うことにした。

一時間歩いても二時間歩いても見つからない。

クリスマスからの雪さえ無ければ自転車やが使えたのだ。

橘は寒さと歩き回ったことで疲れ果てていた。

元々小学校だったらしい建物の近くで嫌になった。

「もう…帰りたい」

「橘！貴様は死んだ人たちの無念を果たしたくないのか！？」

そんなこと知るか！ヒーローごっこは一人でやれよ！

「何…！」

「何か手がかかりであんのかと思ったら、なにが『狙いは俺だ』だよ

！敵だつて狙つてるなら直接来るだろ！何でわざわざ怒らせたりラ

ーメン食つてんだよ！」

「こうして俺を歩かせ、疲れさせる為の作戦だろう…」

「敵の作戦にわざわざ嵌ってんな！この勘違いヒーロー気取り！」

ここまで行つて橘は後悔した。

桑野は明らかにキレてる。

「所詮貴様も愚民か…」

「おい、ちよつと待てよ！それが正義のする事か？」

「黙れ！俺が絶対の正義なのだ！そして俺の敵である貴様は世界の敵！悪だ。貴様を消す…」桑野は右手を天にかざして叫んだ。

「チエーンジ！ファルマスク！テン！！レディ！ゴー！！！」

桑野の体が光の蛹に包まれる。

蛹にひびが入り、砕けた。

中からクワガタの怪人に変身した桑野が現れた。

「ファルマスク・テン！クワッガー！！！！」

「さつきからうるさい！」

建物の壁が開いた。

よく見ると扉になっている。

中から巨人、Xが現れた。

「『X』…？」

橘は力無く呟く。

「貴様っ…！こいつと知り合いか！思った通りだな！橘！貴様もファルコの人間だ！」

橘は、初めて桑野が本当に壊れていることに気づいた。

「死ね！ファルコ！クワッガーキック！」桑野の必殺技だ。足にエネルギーをまといそのまま蹴る。

「ひ…」

人間に当たればその体は完全に消滅するだろう。

橘は目を瞑った。

衝撃が来ない。

恐る恐る目を開けると何かが橘を包んでいた。

「Xの手…？」

Xは橘を包んだまま立ち上がった。

手を顔の前まで近づけて問いかける。

「危なかったね。大丈夫？」

「は、はい…」

「俺の必殺技が効かない！？」



Xは桑野を見下ろした。

「君……さつきからギヤアギヤア馬鹿みたく叫んでたのは？」

「俺は悪に答える口など持たん！」

「悪？この子、ただの高校生だよな？あの蹴りが当たったら死ぬよね？君、もしかして自己紹介してるの？」「直接聞けばわかるさ。」

そいつは極悪人だ！」

Xは手の上の橘を摘み上げて聞いた。

「……君何したの？万引き？それとも殺人？正直に答えないと指を放すよ」

「何もしてません！本当です！」

「ええい！三文芝居は止めろ！貴様等はファルコの仲間同士だろうが！」

「はあ！？」

「正義の鉄槌を受ける！クワッガーシュート！」

桑野は凄いジャンプ力で飛び上がり、Xの体にエネルギー弾を放った。

Xの体が煙に包まれる

「正義は……勝つ！」

桑野がそう言った直後に後ろから何かがぶつかり、吹き飛んだ。

「何！？」

Xが桑野を軽く蹴ったのだ。

「今何かした？」

言いながらまた桑野を蹴る。

「くそお！もう一度！クワッガー……」

それより早くXの右手がから巨大な銃身が現れた。

Xは何も言わずに光線を放つ。

「俺の最強技のクワッガーシュート以上の威力だと……！？」

Xはクスッと笑った。「何が可笑しい！？」

Xは桑野を無視して、桑野に聞こえ声で左手の橘に話しかける。

「あれが一番強いんだって……？あれは僕の中じゃむしろ弱い方なの

に」

「は…？」

「何…だと…？」

Xは再び足下の桑野に目を向けた。

「あ！君まだいたの？さつさと逃げればいいのに馬鹿だね」

「ヒーローが悪に背中を見せられか！ウオオ！クワツガー！キイ  
ーツクア！」

「少し強く蹴るよ。えい！」

「グアア！」

橘は桑野が負ける筈がないと思っていた。性格は最低だが、その力は最高クラスだと思っていた。

だから、あまりに一方的にやられる桑野が信じられなかった。

桑野は完全に気絶している。

上から見るとクワガタの死骸みたいだ。

「はあ…君弱すぎ。つまんないよ。まあ聞こえてないか」

桑野は決して弱くない。

おかしいのはXの方だ。

Xは桑野を捕まえて、自宅に戻る。

左手には橘を握ったままだ。

「ええ！？ちよつと！？」

「彼氏が今日だけ実家に帰っててイライラしてたんだ。今日はここに泊まっていてよ」

「え…」

橘は正直嬉しかった。

桑野から自分を助けてくれた美少女の家に泊めてもらえるなんて夢のようだ。

部屋の中に二人の男の存在を認めるまでは。

彼らは倒れて動かない。

心なしかボロボロに見える。

「ほら、二人とも起きて公平はこれくらいじゃ気絶しなかったよ」

「…カンベンシテクレ」

「コロサレル…」

「だから、僕は誰かを苛めるのは好きだけど殺すのは嫌いなんだって…弱いなー二人とも。けどこれ以上は死んじやうかもしれないしな…。これじゃ物足りないよ」

「あの…」

「そついえば君らがいたね。けど一人気絶してるか…まあもう一人いるし我慢しようかな」

「い、苛めるって？」

「そのままの意味だけど？あ、二人とも休んでいいよ。この子が動かなくなるまで」

「動かなくなるまで!？」

「アハハ。殺したりしないから安心して」

「嫌だ！助けて！」

「何言つてんの!？さつきは僕が君を助けてあげたんだよ!？次は当然君が僕を助ける番でしょ!？」

「そんな無茶な…」

「君、僕に逆らうの!？」

「え？」

「…イウコトキイトイタハウガイイゾー」

「何なら今すぐこの子たちより酷いことにしてあげてもいいんだけど…。もう一度聞くよ？君、僕に逆らうの？言うこと聞くの？たく…泣いてちゃ分かんないじゃん。さあ早く答える！」

終わり

（後書き）

橘くん可哀想です  
行き当たりばったりで書くからこんな酷いことになりました  
だが、私は謝らない

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7980z/>

---

クワガタムシ

2011年12月25日17時45分発行